

# 世間解

第四〇一号

令和三年 七月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

八月の一日

七月になりました。まだまだ色んな事が落ちつかない日が続いていますが、皆さまにはご本願のお育ての中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと存じます。

八月や六日九日十五日

この句を知ったのは半藤一利さんの『歴史探偵 忘れ残りの記』（文春文庫266）という本でした。この本の中で、「昭和史おぼえ書き」という章に「昭和は遠くなりにけり」というタイトルで二〇一七年九月に書かれた文章です。書き出しから少しだけ引用させていただきます。

先日、ある俳句雑誌でこんな句を見つけて、ウムと思わず唸った。

八月や六日九日十五日

その話を友人の俳人にしたら「その句は八月やを、八月の、八月に、などと変えていろいろの人に詠まれていて、俳句の世界では有名なんだよ」と教えられた。いちばん最初につくった人は不明で、作者未詳となっていたそうなので、いずれにしても六日のヒロシマ、九日のナガサキ、十五日の天皇放送と七十年前の日本敗戦を体験した高齢者が作者なのであろう。

という文章です。文章はそのあと八月によせて戦後の風景をたどり、平和というものへの感慨をかたつてへそれにつけても「昭和は遠くなりにけり」ですな。〜と結ばれていきます。

半藤一利さんは今年の一月十二日にご逝去された方で、もったいないことに私はこの方のことをほとんど存じあげていませんでした。半藤さんのご逝去を伝える色んなニュースの中で、「半藤さんは徹底して戦争の惨禍を繰り返してはいけな」と発言しておられた方でした。「ということを知り遅まきながらご本を

数冊読ませていただいた中でこの句のことを教えていただいたというわけです。

本にも書かれていますようにこの句は私の世代ならほぼ無条件に先の太平洋戦争の事が思い浮かぶうたです。わたしは母から「こんな事があって、あそこがこ

んなふうになって」と豊中で戦争体験のことをいくつか聞かせてもらったことが

あります。しかし、それは聞いて知っただけで、実体験とはほど遠いもので

ありません。思い返せば私が物心ついたころの戦争の名残は梅田の地下街に

ジーツと座っておられた居られた何人かの傷痍軍人の方だと思えます。

しかし、これも大分後になってから「そういうことだったのか」と分かったのだと

思います。

大阪で生まれ育って、今年六十になった私の、それもかすかな記憶の一端がこ

れであります。戦争による惨禍を伝承する事の大切さを思いながら「こんな句が

あって、色んな事を考えています」ということを三十代の方にお話したら、その

方が「この三日間とも近しい人の誕生日です。〈広島・長崎・終戦の日ではあり

ますが、またいのちが生まれた日でもあり〜ということを毎年考えさせられま

す。」とおっしゃいました。

八月の六日九日十五日は毎年めぐってきます。昭和二十年のその日は沢山の

“いのち”が戦争によって奪われた日であり戦争という二度と有ってはならないこ

とが終わりを迎えた日であると共に時のご縁の中で“いのち”が誕生した日でも

あったのです。

二度と繰り返してはならない悲しい日は昭和二十年という記憶すべき歴史の一こ

マだけでは無く、年に一度必ず巡ってくる、その人その人にとって大切な意味を

持った日でもありました。

なんか知らんまに一日過ぎたなあ…という一日も。今日はしんどかったなあ…と

いう一日も。楽しかったなあ…という一日も。私が“いのち”恵まれている

毎日が、私が“いのち”恵まれている一日一日が何方かにとって、私にとって

大切な一日なのでしょう。私にとっては、どの一日もお念仏に願われていない

時は無いのですし、この句のおかげで意味の無い一日など無いのだと教えていた

いたような気がしています。

